

# GLA 隨想 2 GLA の歴史概観

GLA を憂う元会員

2013 年 4 月 3 日 第 1 版

# 目次

1	はじめに	1
2	疑問探求の軌跡	2
2.1	GLA の黎明期：靈的現象の多発	2
2.2	1981 年の予言	3
2.3	1980 年代後半の学び	4
2.4	1993 年：神のみしるし	6
2.5	1995 年：六つの智慧と三つのパラミタ	8
2.6	1999 年：12 月 26 日の神の啓示	9
2.7	2006 年：回生の奇蹟	10
3	煩惱地図の原理	12
4	煩惱地図をベースとする神理の体系の歴史	15
4.1	1988 年以前	15
4.2	1990 年：内界を見取る指針	18
4.3	1994 年：止觀シートの導入（ニュープロジェクト発足）	20
4.4	1995 年：神理カードの更新	20
4.5	1997 年：真我誕生	21
4.6	1999 年：地獄滅消の法の開示	21
4.7	2006 年：菩提心発掘	22
4.8	まとめ	23

# 1 はじめに

GLA 創立四十周年記念プロジェクトの「7つのプログラム」には「歴史の整備」というプログラムがあります。「歴史の整備」について、かつて GLA 誌に掲載されていた一覧表には、「高橋信次先生、高橋佳子先生に導かれた GLA40 年を振り返り、その恩寵と喜びを後世に伝え、未来千年の礎とする」という全体のテーマが示されています。

ここで、「高橋信次先生、高橋佳子先生に導かれた恩寵と喜びを後世に伝える」という必要があるならば、導かれた全期間の恩寵と喜びを伝えるべきではないでしょうか。仮に高橋佳子先生が GLA 創立 80 周年の年に御帰天されるとしますと、高橋信次先生、高橋佳子先生に導かれた期間は合計で 80 年になります。その場合、前半の 40 年のみに限って「恩寵と喜びを後世に伝える」というのは、理由が判然としません。

従って、「高橋信次先生、高橋佳子先生に導かれた」の部分と、「恩寵と喜びを後世に伝え」の部分は、他の方が書き加えられたものであって、先生から提示して頂いたヒントは「GLA40 年を振り返り、未来千年の礎とする」ということではなかったかと推測します。

ここで、「未来千年の礎とする」について、私にはその意味の全貌を把握しきれないの面がありますが、「GLA40 年の歴史から、千年の伝承を果たすための智慧を発掘する」という意味は含まれているのではないかでしょうか。

そこで、本レポートでは、GLA40 年の歴史を振り返りながら、歴史に秘められた智慧を発掘することに挑戦してみたいと思います。

GLA40 年の歴史の中で特筆すべきことの一つとして、1976 年の「法の継承」を契機として、GLA から何人もの方々が離脱されたことが挙げられます。この事件について、私自身の見解を表明することが妥当であるのかどうか迷っている点もありますので、本レポートではこの事件には触れず、必要を感じた場合には、別途発表させて頂きたいと思います。

## 2 疑問探求の軌跡

かつて GLA に起こったことについて、私は様々な疑問を抱き、それらの疑問に対する解答を探求してきました。それが智慧を育んでゆく鍛錬になったのではないかと思います。本節では、その一端をお伝えしたいと思います。

### 2.1 GLA の黎明期：靈的現象の多発

GLA の黎明期には、靈的現象がきわめて頻繁に現れました。例えば、「信次先生のご講演を一度頂いただけで靈道が開き、過去世を思い出した」というような事例が、信次先生の御著書には、数多く掲載されています。なぜこのように靈的現象が多発したのか、疑問に思いました。

その解答は、「心の発見・神理編」の p57 にある、次のモーゼの言葉に示されていたのではないでしょうか。

「私の出た当時に比較して、現代は物質文明が発達しているために便利な面が多い。書くことも自由、通信も発達している。コミュニケーションが楽にできる。むしろ困難なのは、経済時代の中で失われつつある人間の心の恢復である。しかし物質文明の時代といえども、多くの人々によって靈的現象が起こされて行けば、人間自身が、心のどこかで神の子としての自覚を芽生えさせざるを得ないだろう」

すなわち、何もないところから GLA を始めるには多くの方々の注目を集めが必要があり、そのために方便として靈的現象が使われたということになります。ただ、会員の皆様の関心が靈的現象に向いたままであれば、魂の救済を果たしてゆくことが難しくなります。従って、やがてこの方便を捨て去り、方針転換を果たす時が訪れるのは、最初から予定されていたことではなかつたかと思われます。

## 2.2 1981 年の予言

高橋信次先生、高橋佳子先生のされた予言が外れたということがインターネット上で揶揄されています。高橋信次先生は、1976 年に「あと 5 年経ちますと、あらゆる所で大きな現象が起ころります」と予言されました。また、インターネット上の情報によれば、GLA 誌 1977 年 4 月号 13 頁に「天使ガブリエルのメッセージ 決意と行動を求める：GLA 主宰・高橋佳子」という記事があり、その中に「ただいまより四年後に、あなたがたの予想を越えた世界的なショックが襲うでしょう」という予言があったということです。しかし、1981 年には、それほどの大きな事件は起こらず、上述の予言は外れました。

そこで、これらの予言の意味を考えてみたいと思います。私は、1980 年代に GLA に入会させて頂きましたが、入会前に GLA に関して得ていた情報は、信次先生の御著書と、佳子先生の真創世記 3 部作のみでした。それらの御著書に基づいて、私は GLA について「靈道現証について積極的に探求している」というイメージを抱いていましたが、そのイメージは入会直後に崩れました。

GLA の場では、天上界の話や靈道現証の話を持ち出すことが場違いな雰囲気を感じました。「そのような話をするな」と言われたことはありませんでしたが、「そのような話を探求しても何にもならない。私達は自らの内界を知つて浄化してゆくことが大切なのだ」という風土が GLA の場を占めていたように感じました。

そのような風土がいつごろから GLA に醸成され始めたのか私には解りませんが、もしかすると、予言の結果が出た 1981 年頃ではないでしょうか。この点については、当時から会員であった方々に検証して頂く必要がありますが、私は上述のように推測しております。この推測が正しいのであれば、「外れるような予言をして頂く」ということは、GLA の場の風土を醸成してゆくために必要なことではなかったかと思われます。

## 2.3 1980 年代後半の学び

1985 年 2 月から「人間のまなざし」シリーズの御著書が発刊されました。また、1985 年 4 月号から GLA 誌にて「人生のアルファとオメガ」の連載が開始されました。これらの内容の高度さ、および分量の多さに、私は「これは厳しい。とてもついていけない」と思いましたが、同じように思われた方も多かったのではないか。それと同時に、「先生がなさっていることでもあるし、自分の出来る限りの努力をしてゆくしかない」と思っていたことも思い出されます。

人間のまなざしシリーズの御著書は 1988 年末に完結しました。その頃、職員の方を通じて、先生のお言葉をお聞きした記憶があります。それは、「説くべきことは全部説いてしまった。これから GLA では、八正道を繰り返し学んでゆくのだ」ということでした。私がそのお言葉を記憶しているのは、そのときに「ああ、よかったです」と安堵したからです。つまり、私自身、人間のまなざしシリーズによる学びがかなり消化不良ぎみであったことを自覚していたため、繰り返し学べるのであれば、これで埋め合わせができると思いました。

しかし、「人間のまなざし」シリーズによる八正道の学びが繰り返されることはありませんでした。これらの御著書による学びは何のためにあったのでしょうか。

まず、「説くべきことは全部説いてしまった」というのは、今から考えると、誤りであることが解ります。煩惱地図についても、菩提心発掘についても、まだ何も説かれていませんからです。ただ、その時点でお説きになれる事を全て説いて頂いたことは事実であると思いますし、そのようにされたのは神からの促しに基づくものではないでしょうか。1988 年末には、その時点でお説きになれる神理は全て説かれたということですから、その後に説かれた神理は、その後に天上界から通信された内容、あるいは先生がアクセスされた青写真の内容であるということになります。

従って、私たちが 1988 年末の時点で説かれた神理の内容を把握できていれば、その後に先生が説かれた神理を辿ってゆくと、先生がどのような通信を受けられ、あるいはどのようにして青写真にアクセスされたのかが、かなり見え

てくるのではないかと思えます。

キリスト教では、イエス・キリストの足跡を反芻し、追体験することによって神への道を辿る靈操行が伝承されています。ならば、私たちは「高橋佳子先生のご足跡を反芻し、追体験する」ということによって神への道を辿ることができるのでないでしょうか。そのためには、先生がどのようにして神理の体系を構築されてきたのかを私たちは知っておく必要があり、1988年末の時点で「お説きになれる全てを説いて頂く」ということは、とても大切な意味があったのではないかと思われます。

先生のご足跡を追体験させて頂く必要性について、もう一つの根拠を挙げさせて頂きます。1984年のGLA誌では、ほぼ一年をかけて釈尊の人生（出生から大悟までの過程）を辿りました。1984年2月号の10～11ページには、次のように記されています。

「ゴータマ・ブッダの足跡を私たちが本当に辿ろうとするならば、少なくとも心に置かなければならぬことがあります。本当に、この魂の軌跡を、自分自身として、自らの歩みとして辿ろうとする熱き想いを抱いているのならば。

私たちが自ら自身の歩みとして、ブッダの足跡を辿ること、それは、その言葉の通り、私たち自身が歩んでいかなければなりません。決して、傍観者のように視線をおくるのではありません。智慧の光も、外に見出した宝をしまい込むように、手を伸ばして掴み自らの中に取り込むではありません。またそうして自らのうちに保つことのできるものではありません。ブッダの歩みを私たち自身の生きている現実全体と切り離してはならないということです。…

ブッダの歩みを辿ることも、それは、他ならぬ、自ら自身の内なる歩みであり、私たち自身の、現実と結びついた具体的な生き方でなければなりません。」

釈尊の人生を辿ることは大切な学びでありましたが、私たちにとって高橋佳子先生の人生を辿らせて頂くことは、それ以上に大切なことではないでしょうか。

なお、神理の体系が構築されてゆく具体的な過程については、後の節にて私の考えを説明させて頂きます。

## 2.4 1993年：神のみしるし

1993年3月3日には「神のみしるし」が示されるという出来事が起こりました。その意味について、GLAからは『神が「先生こそ神の御心を生きられ、神の御業を現してゆかれる方である」と証して下さった』という解釈が発信されていますが、一体何のために先生を証して頂く必要があったのか駄然としません。

「神のみしるし」の意味について、私には測り知れないものがありますが、一つの側面として、その後に神理の体系が構築されてゆく契機になったという意味はあったのではないかと思います。おそらく、先生はその後に説かれる神理の体系について、なんらかの気づきを得られたのではないかと思います。それは、例えば、「より多くの人々を救済してゆくためには、煩惱のタイプ別に異なる指針を示した方が良いのかもしれない」という漠然としたものであったと思います。

その時に神が奇跡を起こされ、「それでよい。その道を進みなさい」と呼びかけられたのではないでしょうか。先生はさらにヴィジョンを突き詰めてゆかれ、煩惱地図をベースとした神理の体系を構築してゆく歩みを進められたのだと考えます。その歩みが結実した年が1998年であったのではないでしょうか。GLA誌1999年3月号の32ページには次のように記載されています。

グランドチャレンジの起動条件——「基盤論」(『DISCOVERY』)、「自業論」(『希望の原理』)、「響動論」(『グランドチャレンジ』)の三論が、先生によって鼎立されたかけがえのない年、1998年。それは、93年3月3日のビッグバンで現象世界に蒔かれた種が結実した年であったと、先生は語られます。

煩惱地図をベースとした神理の体系を構築してゆかれるにあたって、「弟子に求める信仰の姿勢」についても、変化があったように見受けられます。以前、先生は、「簡単に結論を求める」という姿勢をしばしば戒めておられまし

た。例えば、「古き住処を出て大地を踏みしめよ」の139ページには、次のようにお言葉があります。

あなたは観客ではないということです。私の言葉の結論を待っていては駄目です。「あなたの言っていることは、結局どういうことなのか？それを待っているんだ」と気長に構えていては、私たちは共に見つめてゆくことはできません。

しかし、煩悩地図をベースとした神理の体系では、自己診断チャートに取り組むだけで、「現状がどうなっているのか」、「どのような行に取り組めばよいのか」、「それによって、どのような可能性が拓けるのか」という見通しがすぐに立つようになりました。この点も、より多くの人々を救済してゆくためには、必要なことであったと思います。自らの井戸を掘るなど、「道なき道を歩む」という取り組みも大切ですが、それは信仰が確立した後に挑戦して頂いてもかまわない、ということではないでしょうか。

神のみしるしや、啓示の意味は、先生ご自身もその時点では正確にはお解りにならない場合が多いように見受けられます。そうしますと、その時点で弟子が意味を解明することは、ほとんど不可能なことではないでしょうか。

しかし、何年かの期間が経過すると、神のみしるしや、啓示の意味を弟子が解明してゆける場合があるのではないでしょうか。勿論、「全てをクリアにする」ということは難しいと思いますが、「以前よりも真相に迫ってゆく」ことはできると思われます。1993年の神のみしるしの意味についても、先生の1993年以前の具現のされ方と1993年以降の具現のされ方を比較できるようになって、初めて意味の解明を進めることができたるのではないかでしょうか。

従って、神のみしるしや、啓示にの意味についての解釈は、「一度解釈すれば終わり」ということではなく、時間を置いて再検討してみる必要があるのではないかと考えます。そして、解釈を改めた場合には、その都度会員の皆様に共有して頂く必要があるのではないか、とも考えます。

## 2.5 1995年：六つの智慧と三つのパラミタ

1995年には、各層別セミナーで六つの智慧（賢明、無垢、創造、浄化、自律、托身）を滅の次元に置いた学びの時を頂きました。特に青年塾における学びの内容は、御著書「レボリューション」にて詳述されています。しかし、それ以降、煩惱のタイプ別に滅の次元が示されるようになりますと、六つの智慧というものがほとんど話題に昇らなくなってしまいました。これでは、「六つの智慧についてはもう考えなくて良いのか」という疑問が湧いてきます。

また、1995年には、三つのパラミタ（成長のパラミタ、関わりのパラミタ、具現のパラミタ）についても開示して頂きました。三つのパラミタについては、四聖日の学び、生活実践、プロジェクトで育まれる智慧を説明するために、今日においても様々なパンフレットなどで頻繁に紹介されています。しかし、三つのパラミタが、具体的にどのような内容を有しているのか、なぜか説明が見当たりません。この点についても疑問が湧いてくるのではないでしょうか。

しかし、1995年の学びを振り返ると、これら2つの疑問が同時に解決されることが分かります。

GLA誌1995年8月号の68ページより「シリーズ誌上講演会3（'95 こころの看護学校セミナー）」の記事が掲載されており、72～73ページには、「女性業の三要素」として、「執着の強い妻」「現実に埋没した主婦」「幼稚な娘」が示され、74～74ページにはそれぞれに対して、「同伴者となる」「共育者となる」「冒険者となる」という滅の次元が示されています。そして、85ページに示された図表（真の母性を抱いた親の魂となるために）には、次のような「テーマ」が示されています。

- ・ 同伴者となるために…賢明と無垢
  - ◇テーマ：“人間関係”の変革
- ・ 共育者となるために…創造と浄化
  - ◇テーマ：“場”の変革
- ・ 冒険者となるために…自律と托身
  - ◇テーマ：“自己”の変革

ここで、「“人間関係”の変革」とは、「関わりのパラミタ」を育むことと同義であり、同様に「“場”の変革」とは「具現のパラミタ」を、「“自己”の変革」とは「成長のパラミタ」を、それぞれ育むことと同義であると考えられます。そうしますと、三つのパラミタと六つの智慧は、次のような対応関係を有していることになります。

- ・成長のパラミタ：自律と托身
- ・関わりのパラミタ：賢明と無垢
- ・具現のパラミタ：創造と浄化

三つのパラミタと六つの智慧の関係は、大切なことであると思いますので、今からでも会員の皆様に共有して頂くとともに、各種のパンフレットなどにも反映して頂く必要があるのではないかでしょうか。さらに考えますと、三つのパラミタは、御著書「ディスカバリー」「希望の原理」などに示されている滅の次元にも重なるのではないかと思われます。

- ・成長のパラミタ：一心に精進する求道者、「認識の歪み」からの解放
- ・関わりのパラミタ：一期一会に尽くす同伴者、「関わりの錫型」からの解放
- ・具現のパラミタ：愛を育む奉仕者、「具現の壁」からの解放

## 2.6 1999年：12月26日の神の啓示

GLA誌2000年4月号の44~69ページには、「特別企画 12月26日の神の啓示」という記事が掲載されています。その46ページには、先生が受けられた神の啓示の冒頭部分「そのとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が聞く」が示されています。

同誌の51ページ以降には、この啓示のいのちを語り合う座談が掲載されていますが、「見えない人」「聞こえない人」が「視覚を失った人」「聴覚を失った人」という意味で使われています。

これまで、回生の奇蹟として、医学では説明のつかない出来事を様々見せて頂きましたが、「視覚を失った人が見えるようになった」、「聴覚を失った人が

聞こえるようになった」という事実は、おそらく今まで無かったのではないかと考えます。従って、「見えない人」「聞こえない人」を「視覚を失った人」「聴覚を失った人」という意味で解釈することは不適切ではないかと考えます。

また、60 ページには、『この「神の家」「神の砦」ということについて、先生は、この啓示の中で最も核心の部分であり、まだ十分にその意味が解き明かされてはいないけれど、本当に大切にしたいとおっしゃいましたね。』という谷口講師のご発言があります。従って、この時点では佳子先生ご自身も啓示の意味を明確には把握されていなかったのであり、この時点で弟子が啓示の意味を解明することは不可能なことであったと思います。

私は、1999 年 12 月の神の啓示は、その時点で既に実現していることではなく、「まだ実現しておらず、これから実現しなければならないこと」を啓示されたものであると考えます。その具体的な内容についての私の考えは、後述の「2006 年：回生の奇蹟」にて詳述させて頂きます。

## 2.7 2006 年：回生の奇蹟

2006 年 1 月には、様々な形で「光の物質化現象」「回生の奇蹟」が起こり、同年 3 月のジェネシスプロジェクト研鑽特別研修、4 月の善友の集いの前半プログラムなどで、そのよびかけを聞く場が持たれました。私は、その場に参加させて頂いて、とても疑問に思ったことがあります。それは、「本当の奇蹟は人の心が変わること」という点について、全く発信が無かったように思えたからです。この点を発信して頂かないと、入会後間もない方などが奇蹟の意味を誤解される場合が生じるのではないか、とも思いました。「回生の奇蹟」は 2006 年以前にも頻発した時期がありましたが、その際には「本当の奇蹟は人の心が変わること」という点は総合本部から発信されていたのではないかと考えます。

2006 年に、なぜこの発信が無かったのかと考えてみると、もしかすると、先生が「その発信をしないように」と指示されたのかもしれないと思いました。もし、そのような御指示があったとすると、それは「発信しなくても奇蹟の意味を誤解する人が出ない」という意味ではないでしょうか。すなわち、2006 年の時点で「GLA の場」というものが、その場に身をおいているだけで人間

として本来のものの見方、考え方を恢復させてゆく力を既に獲得しており、入会後間もない方であっても、その風土に共鳴されることによって、奇蹟の意味を正しく受け取ることができるようになっていたのではないかでしょうか。

さらに具体的に考えますと、おそらくこの時期、『本当の奇蹟は人の心が変わること』という公案に応えて生きる人が数多く誕生していたのではないかと思います。これにより、実践がそこまで進んでいない方々にとっても、この公案に応えて生きる同志がすぐ近くにいるような状態になったため、その風土に共鳴できるようになったのではないかでしょうか。従って、『本当の奇蹟は人の心が変わること』ということを、舞台上から、あるいは GLA 誌から発信する必要がなくなったということではないかと思われます。

以上申し上げた仮説には、検証が必要かと思います。特に入会後間もない方々の感想シートなどによって、奇蹟の意味を本当に正しく受け取っておられるのか、確認して頂く必要があるのではないかと思います。

もし、この仮説が正しかった場合には、1999 年 12 月 26 日に先生が受けられた神の啓示は、正にこのことを預言するものではなかったかと考えます。すなわち、「見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が聞く」とは、「カルマと三つの「ち」に呑まれた人々が、人間として本来のものの見方、考え方を恢復させる」ということであり、「神の家」「神の砦」とは、「その場に身を置くだけで、目が開き、耳が聞く場所」ということではないでしょうか。

### 3 煩惱地図の原理

神理の体系が構築されてゆく過程を辿ることによって高橋佳子先生のご足跡を追体験させて頂くためには、煩惱地図について、まだ先生が説かれていないことを説明させて頂く必要があるのではないかと思います。

煩惱地図では、四つの煩惱（快暴流、苦暴流、快衰退、苦衰退）のそれぞれに対して、受発色の主要な系列が3つ存在します。また、12の菩提心も、四つの煩惱のそれぞれに対して、3つずつ割り振られています。この節で探求したいことは、ここで共通して現れた「3」という数字の意味についてです。

私達は、外からの刺激（出来事）に対して、「感覚（感じ）→感情（受け止め）→思考（考え）→意志（行為）」の順にエネルギーが流れ、表面意識の四つの極が動きます。一方、煩惱地図では、表面意識の動きを「受信」および「発信」の二段階でとらえます。ここで、「受信」とは、「感覚→感情→思考」の段階で流れるエネルギーの傾向を示すものであり、「発信」とは、「思考→意志」の段階で流れるエネルギーの傾向を示すものではないでしょうか。

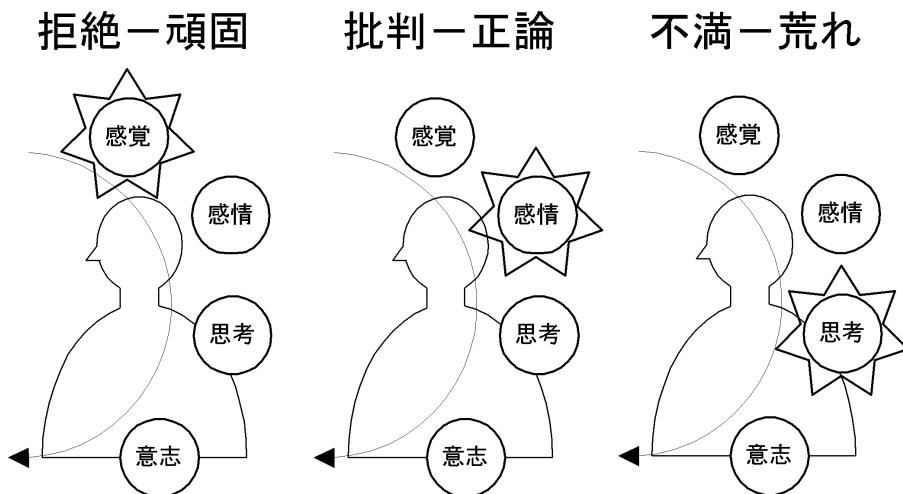


図1 受発色の3系列の状態（苦暴流の例）

ここで、「受信」のエネルギーは、感覚、感情、思考のうち最も歪みが大きいものによって左右される傾向が強いのではないかと思われます。そして、「発信」のエネルギーの傾向は、「受信」のエネルギーの傾向によって、ほぼ従属的に決まってくるのではないかと思われます。従って、受発色の主要な3系列は、各々「感覚」、「感情」、「思考」に対応しているのではないかでしょうか。

例えば、「苦暴流」の場合では、特に「感覚」の歪が大きいとき、感覚→感情→思考の順に流れる受信のエネルギーは「拒絶」の傾向が強くなるのではないかでしょうか。同様に、「感情」の歪が大きいときは「批判」の傾向が強くなり、「思考」の歪が大きいときは「不満」の傾向が強くなるように見受けられます。その受信のエネルギーに対して、「思考」において発信に向かうエネルギーが形成され、そのエネルギーが「意志」に流れ込みますと、それぞれ「頑固」、「正論」、「荒れ」という傾向を帯びた発信がされやすくなるのではないかでしょうか。この「苦暴流」を例とする受信および発信の様子を図1に示します。

止観シートの分かち合いの場において、例えば「この受信は『拒絶』だろうか？『批判』だろうか？」ということで悩んでおられる方を時折お見受けしますが、この点は悩む必要は無いと思います。例えば苦暴流の受信である「拒絶」、「批判」、「不満」の区別は、感覚、感情、思考のうち相対的に歪が大きい極によって決まります。それゆえ、感覚、感情の歪が同程度の大きさであれば、「『拒絶』とも言えるし『批判』とも言える」という状態が生じても、自然なことかと思われます。

上述しましたことは、「もし、自分の『感覚』が大きく歪んでいると、自分の意識はどのように動くだろうか」「『感情』あるいは『思考』が歪んでいるとどうなるだろうか」ということを想定して内界の動きを辿って頂くと、ご理解頂けることではないかと思います。

「12の菩提心」についても、やはり4つの煩惱の感覚、感情、思考という事に対応しているように思われます。その結果をまとめてみると、次の表のようになるのではないかでしょうか。

偽我埋没	善我確立	発掘すべき菩提心
(快暴流)		
感覚 歪曲－独尊	正直－愚覺	月の心
感情 優位－支配／差別	畏敬－同伴	稲穂の心
思考 欲得－貪り	無私－簡素	觀音の心
(苦暴流)		
感覚 拒絶－頑固	受容－碎身	空の心
感情 批判－正論	共感－愛語	川の心
思考 不満－荒れ	内省－献身	海の心
(苦衰退)		
感覚 恐怖－逃避	自律－責任	山の心
感情 否定－鈍重	肯定－明朗	大地の心
思考 卑屈－愚痴	素直－懸命	太陽の心
(快衰退)		
感覚 満足－怠惰	後悔－切実	火の心
感情 鈍感－曖昧	鋭敏－実行	泉の心
思考 依存－契約	回帰－率直	風の心

## 4 煩惱地図をベースとする神理の体系の歴史

### 4.1 1988 年以前

#### 煩惱地図について

「人間のまなざし 正業・はたらきのみち」の 64 ページには、「引力・斥力・中和力」という図が掲載されており、62~66 ページには関連する説明が掲載されています。この部分の内容によると、不調和な状態では引力は「貪」、斥力は「瞋」として現われ、萎えている中和力は「痴」として現われます。一方、中和力を育成して調和すると、引力は「魂の共感・感動」、斥力は「本然を阻むものを斥けること」、中和力は「智慧」として現われるということです。

また、同著 89 ページには、「能動・受動・中和」という図が掲載されており、86~88 ページには、関連する説明が掲載されています。この部分の内容によると、受動性に傾いた不調和な状態では「欲求の暴流がない」、「無関心、無責任、無感動」という症状が現われ、能動性に傾いた不調和な状態では「欲求の暴流になりやすい」、「活発」という症状が現われます。一方、中和力を育成して調和すると、受動の側面においては「ゆるし（悲愛）」、能動の側面においては「てらし（慈愛）」という状態が生まれるということです。

これら 2 つの図は、何れも、「中和力を育んで、不調和を調和に転換する」という点で共通していますが、「不調和」、「調和」の各状態で働いている力の説明が相違しており、2 つの図がどのような関係を持っているのか、解りづらいのではないかと思います。「引力・斥力」は「快苦」に相当し、「能動・受動」は「暴流・衰退」に相当するものと思われますので、これら 2 つの図を合体すると、これは煩惱地図と相似形を成すものになります。

しかし、同著 80~82 ページには、次の御文章が掲載されています。

つまり、私たちは、エネルギーを外に向かって発散するとなると欲求の暴流と化しやすく、そうしないとすると今度は、実に無気力な生命力の欠如——倦怠——に陥りやすいのではないか。人間を二種類に分類することなどそれほど意味のあることではありませんし、元来それほど単純にできるものではないかも知れませんが、私が今まで接して

きた多くの人々は、このどちらかの傾向を自分自身の特徴としてより強く抱いていたということができます。

つまり、1986年の時点では、高橋佳子先生ご自身が「分類することはそれほど意味のあることではない」と認識しておられたということは、当時はそれ以上の探求が進む状況ではなかったことになります。

ここで疑問に思いますことは、煩惱の総数が「108」であることが仏教で伝承されてきたということです。この事実は「108煩惱を明記した煩惱地図が太古の昔から如来界に存在していた」ということを前提として初めて理解できることではないでしょうか。そのあたりの事情はよく解りませんが、先生でさえも「魂の記憶」を完全に取り戻すことは難しい、ということなのかもしれません。

## 12の菩提心について

神理カードは、1987年の新年の集いにて初めて開示されました。その時点の神理カードの内容は、1994年まで維持されたものと思われます。GLA誌1994年3月号61ページによれば、1994年の時点における神理カードは次のような内容になっています。

- ・大いなる慈悲の心を育みます  
人々の苦しみを引き受け／生命を守るために
- ・太陽のごとき愛の心を育みます  
心を尽くしてあらゆる人々の手足となれるように
- ・空のごとき自由無碍な心を育みます  
何ごとにもとらわれず／無心に生きることができるよう
- ・風のごときこころを育みます  
切なる願いを自他の心に起こすことができるよう
- ・山のごとき安らぎの心を育みます  
どんな不理解にも困難にも揺らぐことがないように
- ・大地の如き豊かな心を育みます  
あらゆる存在の仏性を開花させることができるよう

- ・泉のごとき智慧の心を育みます  
一切の神理を楽しく理解できるように
- ・海のごとき広き心を育みます  
様々な違いを包容して、ひとつに結ぶことができるよう
- ・火のごとき熱き心を育みます／倦（う）むことなく、  
現在のいのちをこめてはたらきをなすことができるよう
- ・一切の出会いに感謝できる心を育みます  
どんなときも菩薩道を歩むことができるよう

当時の神理カードには、「川の心」、「月の心」に対応するもののがなく、全部で十種類しかありません。また、現在の「12の菩提心」に対応するカードについても、内容が若干異なっています。やはり、「四つの煩惱」、「感覚、感情、思考の歪みから生じる3通りの受発色の流れ」という認識がなければ、「12の菩提心」を見出してゆくことはできないものと考えます。

### 内界を見取る行について

1982年4月より「自己開墾セミナー」というセミナーが各地で開催され、その場にて授受される「成長の記」を通じて、内界の看取りが始まりました。

「成長の記」の構成は、「出来事」、「想い」「誘いの言葉」、「学び」、「願い・祈り」になっています。自身の内界の動きは、全て「想い」の欄に記載しますので、「四つの極（感覚、感情、思考、意志）に分けて内界の動きをみつめる」ということではありませんでした。

四つの極の関係について先生がどのように認識されていたかは、1985年に発刊された御著書「心の働き 存在の働き もう一つの調和へ」に示されています。同著の57ページには、次のような御文章があります。

当然のことながら、感情と思考は、同じ質の同じ方向性をもった働きではありません。むしろ、ぶつかり合い、時には対立さえするものです。感情はアクセルとブレーキ、思考はハンドルです。

私たちの想念は、このように働きが互いに共働して（一緒に働いて）生み出されるものです。ですから、当然のように複雑で矛盾に満ちたも

のになりやすいのです。

つまり、四つの極の関係は、「複雑で矛盾に満ちたもの」であり、いくつかのパターンに簡単に分類できるものではないということになります。確かに、意識の働きを漠然と見つめようすると、なかなか複雑で捉え切れない面があると思われます。

しかし、ある「出来事」が生じ、その瞬間に私たちがある「行動」を取るときに限定して考えると、意識の働きはかなり単純に捉えることができます。その場合、四つの極は、「感覚」→「感情」→「思考」→「意志」の順で、一方通行に動き、しかもその動きは、せいぜい数種類程度の限られたパターンのうちの何れかに過ぎません。

今日、私たちは止観シートの取り組みなどを通じてそのことを認識できるわけですが、1985年の時点では、先生ご自身がそのことを認識されていなかつたことになります。

## 4.2 1990年：内界を見取る指針

GLA誌1990年4月の「人生のアルファとオメガ 61」には、「未成熟な意識」の型として、次のようなものが例示されています。

- ・ カメレオン型：自分の考えや価値観を奥に隠し、他人に合わせることによって、葛藤や圧迫を避けようとする意識
- ・ サーヴァント型（召し使い型）：相手の意識を先回りして読み、相手が求めているものを差し出したり、相手が好むような人間像を演じてゆく。
- ・ カタツムリ型：自分の殻に閉じこもることによって、葛藤や圧迫を避けようとする意識の型。とても引っ込み思案で、人と関わったりぶつかりたりすることを恐れる想いの流れからつくられてゆきます。
- ・ その他：自分を大きく見せて相手を威嚇したり、自分が優位に立つことによって、自分の怯えや不安を隠そうとする意識の型。いつも事態を少し離れたところから眺め、自分に危害が及ばない程度の距離を保ちながら関わる。他のことに逃避し、気を紛らして忘れようとする型。ものごとを曖昧にしたりごまかしたり、相手との間にバリヤーをつくったりす

る型。他人よりも多くの努力を積み重ねることでしか安心できない、努力し続けていないと不安でしかたがないという型。

この内容によりますと、煩惱を「快苦」「暴流・衰退」の軸をで分類することについて、先生はまだ認識されていないように見受けられます。

上述の分類の中では、カメレオン型もサーヴァント型も、依存—契約—癒着の受発色が出やすい点で共通しており、相手と結ぼうとする契約が「同盟契約」であるのか、「召し使い契約」であるのかの違いに留まるように思えます。両者は煩惱地図の上では同種の煩惱として一つにまとめられるのですが、両者が取る行動自体は異なるため、両者が同種の煩惱であることを煩惱地図なしで見抜くことは困難を極めるのではないでしょうか。その意味では、煩惱地図は、「煩惱を分類する智慧」であると同時に「同種の煩惱を統合する智慧」でもあると思います。

但し、この記事の39~40ページには、後年の「止観シート」につながる次のような御文章が掲載されています。

反省に取り組んで、もしなかなか自分を変えられないとしたら、それは反省のしかたがどこか誤っているからです。真の意味での深みに向かって反芻してゆく反省になっていないからです。そして、殆どの原因是、内視力が育っていないために、意識の自己相対化、自己認識が正しくできないことにあるのです。

まず、内界に親しむ機会を増やすことです。そして、遊園地のジェットコースターのように、すさまじいスピードで外界の出来事を「感じ」「受けとめ」「考え」「行為」している時の、自分の意識の流れをあるがままに掴むこと。そのエネルギーの流れを止めて見つめるという内的訓練を重ねることです。訓練を重ねるうちに必ず見えるようになります。そうすれば、自分を動き動かしているエネルギーの正体、欲望や恐怖の正体、つくってきた意識の型や自分に流れ込んでいる心の遺伝子があるがままに見つめることができるのです。

### 4.3 1994年：止観シートの導入（ニュープロジェクト発足）

上述のように、高橋佳子先生は1990年には止観シートの基礎になる内界の見取り方を開示されましたが、その4年後の1994年には、止観シートが導入されるとともに、ニュープロジェクトが発足しました。

1994年8月号の53、61ページには、東京本部および中京本部のプロジェクト（まだニュープロジェクトではない）にて、同年の5月～6月にかけて「ちょっと待てよと止観する」シート（「止観シート」の当初の名称）の取り組みがあった旨が掲載されています。これが止観シートの取り組みの始まりであったようです。

### 4.4 1995年：神理カードの更新

GLA誌1995年2月号76ページの記事「光転への智慧を示す神理カード」によれば、1995年の新年の集いにて頒布された神理カードは、それまでのものから一新され、現在の神理カード（すなわち12の菩提心）と同じ内容になりました。

「12の菩提心」を見出してゆくためには、次のようなステップを辿る必要があるのではないかと考えます。

1. 「快苦」、「暴流・衰退」の軸で煩惱を四つに大別する
2. 四つの煩惱のそれぞれにおいて、感覚、感情、思考の歪みから生じる3通りの受発色の流れを見出す
3. 各受発色の流れを本来化してゆく菩提心を言葉によって表現する

しかし、12の菩提心と煩惱地図の関係について、佳子先生は、まだ認識されておられなかったように見受けられます。なお、その理由について詳細は後述します。

従って、上述のステップを辿って「12の菩提心」を見出された方は信次先生であり、信次先生から佳子先生に対して「12の菩提心」の内容が直接的かつ具体的に通信されたのではないかと思われます。

## 4.5 1997年：真我誕生

1997年の全国感謝の集いでは、「真我誕生」が説かれました。「偽我に呑まれた私たちが善我を育むことにより真我誕生を果たす」ということは1997年に初めて説かれましたが、これは上述しました「人間のまなざし 正業・はたらきのみち」に示されている「中和力を育んで、不調和を調和に転換する」ということと理念において共通しているように見受けられます。このように、多くの場合、高橋佳子先生の説かれる神理は、「段階的に深化している」と考えることが正しいのではないでしょうか。

## 4.6 1999年：地獄滅消の法の開示

1999年善友の集いでは地獄滅消の法が開示されました。地獄滅消の法は、内界と外界の関係を「受発色」（但し、この時点では「受信・発信・現実」という表現が使われている）という視点で捉える点において、かなり目新しいのではないかと思われます。この理念に通じるものは、過去に説かれたことは無かったものと思います。

GLA誌1999年6月号49ページ中段には、その際の御講義の内容について、次のような文章があります。

ここで先生は、煩惱地図による四つの煩惱（快・暴流、苦・暴流、快・衰退、苦・衰退）の地獄を表したボードを示される。そして、この地獄をつくっている元凶は、世界に対する感じ方・受けとめ方——受信、考え方・行ない方——発信、そしてそこより生まれる現実にあることが明らかされた。

この文章は、佳子先生の御講義の内容そのものではありませんが、この文章通りの御講義の内容であったとしますと、「受信」を「感じ方（感覚）」「受けとめ方（感情）」のみと対応付けているのは、不正確であると考えます。前節「煩惱地図の原理」にありますように、「受信」の傾向は、感覚、感情、思考のうち相対的に歪が大きい極によって決まりますので、「受信」の説明の中には

「考え方（思考）」も含まれているべきではないでしょうか。

おそらく、1999年善友の集いの時点では、佳子先生は前節の「煩惱地図の原理」を把握しておられなかったのだと思います。つまり、受発色の系列は、佳子先生が見出されたものではなく、信次先生が佳子先生に対して具体的かつ詳細に通信されたものではないでしょうか。通信の時期は、おそらく1999年善友の集いの直前の時期であり、佳子先生は通信の意味について充分に吟味する余裕が無いまま御講義をされたため、ご説明の内容が不正確になってしまったのではないかと考えます。

#### 4.7 2006年：菩提心発掘

2006年の総合新年祈りの集い、そして新年の集いでは、神理カードの内容が「菩提心発掘」という形で初めて説かれました。2006年7月に発刊された「新・祈りのみち」では「菩提心発掘」のための祈りが掲載されており、その中で12の菩提心の掲載順は次の通りになっています。

「月」「火」「空」「山」「稲穂」「泉」「川」「大地」  
「観音」「風」「海」「太陽」

この掲載順は、12の菩提心を「感覚」「感情」「思考」の4つずつのグループに分類し、各グループの中で「快暴流」「快衰退」「苦暴流」「苦衰退」の順で菩提心を配列したものであり、前節の「煩惱地図の原理」に従った規則性が見られます。「新・祈りのみち」を2006年7月に発刊するためには、おそらく草稿は同年4月には完成している必要があったものと思いますので、その時期には、佳子先生は12の菩提心と煩惱地図の関係を正確に把握しておられたのではないかと考えられます。

一方、GLA誌2006年3月号の37ページによれば、12の菩提心は、新年の集いにて、次の順番で開示されており、上述のような規則性は見られません。

「火」「空」「海」「風」「泉」「山」「大地」「太陽」  
「稲穂」「観音」「川」「月」

また、GLA 誌 2006 年 2 月号の 50~51 ページによれば、佳子先生は、総合新年祈りの集いにおいて、四つの煩惱に対応して、次の四つの菩提心を育むことを誘われました。

- ・ 苦衰退：山の心
- ・ 快暴流：風の心
- ・ 快衰退：火の心
- ・ 苦暴流：空の心

「快暴流」に「風の心」を対応付けられたということは、この時点では 12 の菩提心と煩惱地図の関係をまだ把握しておられなかつたのではないかと思われます。そうしますと、「神理カードの内容を『菩提心発掘』として説くように」という神の御意志が佳子先生に伝えられたのは、2005 年の末頃であり、12 の菩提心と煩惱地図の関係について、充分に吟味する余裕が無かつたのではないかでしょうか。そして、「新・祈りのみち」の草稿を完成させるまでの数ヶ月程度の期間内で、両者の関係を整理されていったのではないかでしょうか。

#### 4.8 まとめ

煩惱地図をベースとする神理の体系が構築されてゆく歴史を振り返ってみますと、高橋佳子先生が如何にして天上界との響動を果たしてゆかれたかを垣間見ることができます。天上界からは必要なことが全て開示されるわけではなく、多くのことは地上界の魂が果たさなければならないのであり、そのことによって地上界の魂の成長が果たされてゆくのではないかでしょうか。

高橋佳子先生は、私たち弟子からすると大変に偉大な方ではありますが、天上界から様々なテーマを与えられ、研鑽を積んでおられる点では私たちと同じではないかと思えます。私たちがそのような観座持てるとき、私たちが自ら自身の歩みとして、先生のご足跡を辿る道が拓けてゆくのではないかでしょうか。

以上